

## 【講演会報告】 オスロ大学イブセン研究所所長 クヌート・ブリーニルズヴォル氏 「ヘンリック・イブセンの劇における近代性」

イブセンはシェイクスピアに次ぐ、世界の舞台で最も多く上演される劇作家である。イブセン劇の役柄にはチャレンジが多く、特に女優にとって実力を見せられる物が多い。現在の観客はブルジョワ階層であり、イブセンの劇に取り上げられる問題が自分たちのものであるということもこの人気につながっているであろう。イブセンの劇は世界の様々な文化の中で新しい世代にアピールできるという能力を持っている。それなのになぜ日本ではイブセンへの興味が比較的少なく、イブセンというと何か過去の古臭いもの、という印象があるのだろうか。ここではイブセン劇がいかに現代的であるかをご覧にしたい。

イブセンの劇にはレトロスペクティブが多く、劇の重点は出来事自体よりもそれに関する思想と解釈にあることになる。新しい研究によると、イブセン劇は推理小説や、精神分析学と最も近い関係を持っていることが見られる。論理学者セベオク (Thomas A. Sebeok) によると、これはそのころの医学の症候学<sup>(1)</sup>の思想から受けた影響であるそうだ。症候学の方法は、無意味に見えるかもしれない小さなディテールを元に診断するということにある。精神分析学の始祖フロイト、比較美術学の代表者ジョヴァンニ・モレッリ、そしてシャーロック・ホームズの推理小説で有名なアーサー・コナン・ドイルは症候学の思想を代表する三人である。

オーストリアの文学研究家ハンス・ヒーベルはイブセンの分析的劇と症候学の関係が深いものだと言っている。サイコアナリストと劇の読者が共通としている点は両者とも小さなヒントから見えてくる過去の出来事を少しずつ理解し、現在の問題の元となる場面、[最初の場面]を再建するところにあるとヒーベルは言っている。イブセンの劇は犯罪分析と精神分析の合体なのである。例えば『ロスメルスホルム』の校長先生クロルは妹のベアーテの自殺の本体を探ろうとする。クロルは探偵であり、心理学者でもあるのだ。

『野がも』から続く象徴的な作品でイブセンは[芸術の本質]、そして[芸術家の役割]を問う。これはイブセンが年をとるにつれてますます強まり、イブセン自身が芸術家である自分について考えているように思われている。各劇にはイブセン自身に似た芸術家の役柄が登場する。これらには3タイプある。(1) エクダールやフォルダルのような哀れな人、(2) プレンデルのような皮肉な虚無的態度の持ち主、(3) ルーベックとソルネスのような冷酷でわがままな人で、芸術のためには自分と自分の周りにいる人たちを破滅させる人。この三つである。イブセンにとって[芸術]とは、人間の命を奪いそれで生きていく有害な犯罪的なものであり、同時に人間の内面にある亡命国であるのだ。

しかし、イブセンはいつも芸術を暗い悪質なものとして描いてきたのではない。『ペール・ギュント』はデンマークの哲学者キルケゴールが[美的実存]<sup>(1)</sup>と呼んでいるものをテーマとしている。ペールは、絶えず自分の欠陥や欲望に負けてしまう女たらしだが、ソルヴェイグとの出会いによって[倫理的実存]に気がつく。ペールは絶対的なアイデンティティーが要求される場合にはいつも姿を消す。本当の自分として生きていくことよりも、その場その場にあわせてにせの自分を演じていくのである。こういう意味では現在のアイデンティティークライシスに関する劇でもあるのだ。第五幕の有名なたまねぎ場面でペールはたまねぎの皮を次から次へとむくが芯が見えてこないことを不思議に思う。この場面で象徴されているのはエゴの皮の層が本当の人格である芯の場所をとってしまったということだ。ここでイブセンの劇はモダン主義の重点の一つである[分散]について語っていると言える。言い換えれば、ドイツの美術史学者セーデルマイヤーの言う[芯を無くすこと]

である。ペールの長い旅の後、ソルヴェイグの小屋へたどり着く直前、メタフィジカルな場面がある。ペールの魂に関する真剣な場面だが、ペールはアイロニーを使って逃れる。この「アイロニーによる開放」と言う考えはドイツのロマン主義者であるフィヒテ (Fichte) と、キルケゴールの博士論文からアイデアを受けたものである。イブセンの劇にも、キルケゴールの論文に見えるように、この「開放」によって得られる物は無く、残るは完全な空虚だけである。『ペール・ギュント』とゲーテの『ファウスト』には「悪魔の誘惑」、[アイロニー]、[超現実性]の共通点があり、似ているようだが、ゲーテのファウストが世界を結んでいる芯を探っているのに対して、ペールは根も無ければ、芯も無い人間である。この近代的な人間は複雑な道徳的問題から逃げ、本当の自分の存在から遠い、夢とファンタジーの世界に非難し、ペールは自分を失うのである。

これはエジプトでカイロの精神病院に入れられ、狂人の帝王になる場面だが、この場面とドブレ岩の洞窟の場面にはモダン主義のグロテスクが見える。これらの場面に見えるのはゴヤが言う「理性の眠りは怪物を生む」であり、その他の場面と全く違う。シュールリアリズム派の画家ピカビヤは“reason is a light that lets us see the world as it is not”（「合理が見せてくれるのは世界の嘘の姿」）と言ったが、イブセンのモダン主義にはモンスターを生み出す不合理と盲目的合理が合体していて、これは今でも世界中ですばらしく舞台化されている。

イブセンの後期に書かれた13の劇には様々な関連が見られる。例えばペールと現実に目を向けない『野がも』のエクダールを見比べると、二人とも真実を自分の都合に合わせている者である。写真師であるエクダールは仕事上でも写真に手を加え、もっとよくすることの専門家である。『ペール・ギュント』で真実に立ち向かわないペールに対するイブセンの厳しさは、『野がも』では衰えているが、皮肉が加わり「一般の人間は嘘なしで生きる力が無い」と言っている。

『野がも』のエクダールと『ヨン・ガブリエル・ボルクマン』の主人公の頭取ボルクマンにも似ている点が多い。ボルクマンは「幸福と福祉をすべての人に」という高い理想を持つ人間なのだが、汚職をし、服役後とじこもって生活をする。訪ねてくる親友のウイルヘルムとボルクマンは、繰り返し、空想が今に実現されることを話す。フォルダールはボルクマンがまた間もないうちに頭取になれる事を、ボルクマンはフォルダールの長年書いている悲劇がもうすぐ賞賛される話を、儀式であるかのように繰り返して話し合う。せりふを繰り返すことによって作られる二人の人間の儀式、イブセンはここで不条理演劇を先取っているのである。このような儀式性をもった場面はストリンドベリからベケットの劇にまで見える。例えばベケットの「勝負のあと」ではボルクマンとフォルダールの会話に似たようなものがハムとクロープの会話に見られる。しかし最後につぶれるまで嘘を信じているイブセンの二人とは違い、ベケットの登場人物は、はじめから、行き止まった道で繰り返しの儀式をしていることを自覚しているのである。

世界最高の劇作家であるイブセンは文学の近代化に大きな影響を与えた。ここで少しだけ示すことが出来たように、イブセンはその後に現れるグロテスク、不条理主義、表現主義、そして実存主義的な演劇の先駆けであったのだ。イブセンの大なる賞賛者であるライネル・マリア・リルケはこう言っている：「イブセンほど深く行った人はいない」。

#### イブセン研究所（ノルウェー、オスロ大学）に関する案内：

1. イブセン研究所では今、イブセン手書きの原文を元に新しい、歴史批判的なイブセン集を完成させるため研究が進められています。
2. イブセン研究所では今年（2003年）から英語のマスターコースが（修士課程）が企画されています。イブセン研究に興味がある方は連絡をください。奨学金に関する案内もできる範囲でいたします。

ホームページ <http://www.hf.uio.no/ibssensenteret>

メール [ibssensenteret@ibsen.uio.no](mailto:ibssensenteret@ibsen.uio.no)

注(1) 19世紀デンマークの思想家、ゼエレン・キルケゴールは、人間の救いというテーマに関して、三つの階梯を仮定し、それについて述べている。即ち、芸術的感動による至福体験としての**美的実存**、真理と道徳による自然・社会と人間の調和的次元としての**倫理的実存**、そして信仰による精神的救済の次元即ち**宗教的実存**である。キルケゴールによれば、その救済の度合いは、後者にいけばいくほど、刹那的形象的なレベルから、根源的本質的なレベルへと深化していくという。

(要約：アンネ・ランデ・ペータース)